

スロスマルジャン著

『ジョクジャカルタに  
おける社会変容』Selosoemardjan, *Social Change in Jogjakarta*,  
Ithaca, Cornell Univ. Press, 1962, xxvii+440 p.

## I

インドネシア研究史にアメリカ人が登場してきてからすでに20年を経過した。その成果としても、戦前におけるオランダ人の成果が adat を中心とした社会組織と規範についての研究であったのに対して、人類学的方法がとりいれられて新たな成果がみられるようになった。

そして植民地時代にはインドネシア人による業績がスポモ博士をはじめとする慣習法学者の成果のほかみるべきものがなかったのに対して、戦後のアメリカの影響をうけて多くの少壮学者が政治学、経済学、社会人類学その他の分野に輩出した。そのなかに Cornell 大学に留学して社会学を研究したスロスマルジャンによって提出された博士論文がある。これがわたくしが紹介しようとする『ジョクジャカルタにおける社会変容』である。かれの指導教授 G・McT・ケヒンによってよせられた序文に書かれているように、かれは1958年から3カ年の博士課程を終えて、論文材料収集のため故郷ジョクジャカルタに帰り現地調査を行なったのであった。

この論文を通読して感じたことは、従来の異邦人によって書かれ、あるいは分析された成果にみられない実に得がたい成果であるということである。それは論文全体を通じてにじみでていることだが、同胞が同胞の社会の変容を心暖かく細心に分析していることである。またかれ自身の序論にもあるように、「現地調査をしている間、西欧の学徒は第1次資料をあつめ、そして結論を導くために、体系的な方法論と科学的なディシプリンを用いてそれを組織だて分析する。しかし大多数のインドネシア人は訓練がないためにこのようなことはできない。西欧の学徒によって到達した結論はインドネシア人にとってしばしば非現実的でありまた不合理と思われるということは述べるに値する」(p. xvi)と記している。このことはさらに他のところで詳しくのべられている。

このインドネシア人によって研究された成果のもつ意

義は大きい。以下論文の内容について紹介してみたい。

## II

論文の中心は4部にわかれているが、その第1部はジョクジャカルタの行政における変化、第2部は行政、政党および社会、第3部は社会変容と経済発展、第4部は教育と社会変容という構成である。そして各部はさらに章に分かれている。

「ジョクジャカルタの行政における変化」の第1部においては、植民地時代、日本占領期、前独立期におけるジョクジャカルタの政治構造についての記述にはじまり独立後に及んでいる。この部でかれがのべたジョクジャカルタのもつ封建的領土の権力とその政治構造の分析はオランダ人の業績によっても分明しなかつたいくつかの問題を提起した。特にジャワ人国家の構造としてかれが分析しているダイアグラムはおそらく他の封建的領土の分析にも適用できるものといえよう。この点は、ジョクジャカルタの慣習的支配構造をジャワにおける特殊のケースとして区別したオランダ人学者の見解を否定するものとして注目しなければならない。

スロスマルジャンがかれの故郷ジョクジャカルタの政治構造について行なった分析は以上のことにとどまらず、植民地期から独立後にいたる時期について上部構造から下部構造へと問題を展開している。ことに論文の第2部行政・政党・社会の章における独立後の行政と社会変容の分析は独立インドネシアにおける政治的社会的近代化の過程についての具体的ケースをフォローしたものである。ジョクジャカルタの封建的社會が独立後のインドネシア共和国の一地方として、特別州として再編された過程における伝統的官僚と伝統的支配の子孫である貴族の社会的地位の変容についての分析は、他に同様な分析がないだけに非常に貴重な分析である。地方政治研究が少ない今日の研究状況のなかで、インドネシア共産党は西部ジャワの農村調査を発表した。中部ジャワについても発表されるはずであったが、まだ発表されていない。しかし公式論から離れないことを考えると共産党による農村調査の結果に不安を感じるのである。この点スロスマルジャンの成果はわれわれには共感できるものとして評価する。

ことに、9・30運動を契機とした共産党の中部ジャワにおける集団的抵抗が報道されているが、この中部ジャワにおける共産党の組織の農村ベースへの浸透を把握しなければ問題の真の理解が得られないことはいうまでも

ない。農村における共産党の組織としてのインドネシア農民戦線 (Barisan Tani Indonesia) がジョクジャカルタ社会に定着してゆく過程を分析しているこの研究はこの点からも注目に値する。

近代化の過程をすすむジョクジャカルタ社会でその指標の一つである選挙をとりあげてみると、インドネシア共産党 (Partai Komunis Indonesia—PKI) の1955年および1957年の総選挙ならびに地方選挙におけるキャンペーンのスロスマルジャンの分析は、ハーバート・フェイスの「1955年インドネシア選挙」の分析にみられない下部構造における選挙を対象としている。

さらに都市の下部構造としてのカンポン (Kampung) と農村末端のドック (Duke) およびその集合体であるデッサ (Desa) における政党活動の影響の分析は、伝統的な農村と近代化した都市カンポンがそれぞれ近代政治の浸透によって変容する過程を分析している。

以上の政治過程の分析につづいて社会変容と経済発展についての分析が展開している。

社会変容と経済発展の章においては、小農農業、外国企業、経済発展の社会問題の3節に分かれている。しかし、この章の中心課題は小農農業の問題にあり、外国企業としてとりあげられている甘蔗栽培と製糖業に関連しての小農についての分析はまた、繰り返すようであるが、すぐれた業績といわねばならない。

ことに小農のジョクジャカルタにおける社会的地位の分析は非常に興味がある。「ジョクジャカルタのジャワ人小農は1918年の農地改革前に義務だけがあり権利がなかったが、1918年から1951年の間に権利と義務を得た、そして1951年の地租廃止後には権利だけをもち事実上義務はなくなった」とこの章の冒頭に書かれている。この1918年のジャワ人社会における意義は重要なものであることは従来の西欧人の業績からはほとんどあらわれていなかった。

この点に注目したスロスマルジャンの分析は小農の土地との関係を封建的領主としてのサルタン対小農との関係から分析している。そしてつぎの問題として小農が圧倒的に多数を占めるジョクジャカルタ地域においてオランダ人農園企業が封建的支配体制下において、19世紀初頭以来企業を成立せしめるに際して土地の占有をはかる過程の分析は、従来まったくなかっただけに非常に重要なものである。従来の研究はジャワの糖業が専用甘蔗栽培農場を所有しないで、小農の所有地を輪作的に利用していることについて十分に明らかにしていなかった。こ

の研究によって甘蔗栽培における小農の側の問題が究明されている。

そして1918年の農地改革が農民の社会組織に重要な変化を招来したことの意義について、下部構造の伝統的な共同体的な、また上部構造としての封建的な土地所有の二重構造の分解がはじまることを示唆している。

さらに農民とかれらの環境、インフレーションと農民社会についての重要な問題を取りあげている。ことにインフレーションが農民社会にどのような影響をもたらしているかは非常に興味のある課題である。インフレーションはインドネシア経済の現段階を示すものであるが、これが農村にどのような影響を示しているかの分析は少ない。スロスマルジャンの分析は1960年ごろのことであって、その後5年を経過した現在での真にすさまじい状況は反映していないが、農村におけるインフレーションの影響を把握する上に一つの手がかりを与えるものである。しかし、かれの研究では比較指標が1938年と1958年におかれているところから、現段階の問題を究明する手がかりとしては十分ではない。1938年は第2次大戦にはいる3カ年前であって最も安定したときであって、1958年までの20年の間に1942～45年の日本軍政期と1945～49年の独立闘争期という二つの重要な経済混乱期が介在しており、この二つの時期にインフレーションは発展を示しているのだから、その中間的な指標をあげるべきであったと思う。少なくとも通常インドネシア経済において指標として使用される1953年を100とする指数を使用して、独立期におけるインフレーションを分析するべきであったと思う。

さらに経済発展の社会問題の節において、社会変容の問題について取りあげている。社会変容を招来する外部からのインパクトとしての教育効果について、固有の教育と植民地体制下の教育、日本軍政下の教育の関係、さらに独立インドネシアにおける民族教育の進展についての分析に及んでいる。

そして最後に結論の章において、技術的なコメントを付して、論文の博士論文としての理論形成についての見解を展開している。

以上において、くりかえし述べたが、スロスマルジャンの『ジョクジャカルタにおける社会変容』の分析は非常にきめの細かい、当該国の人でなくてはできない成果といえることができる。

(調査研究部専門調査員 岸 幸 一)